

「暗殺」

★★★★★

2016（平成28）年7月27日追賞

<シネマート心斎橋>

監督・脚本：チェ・ドンフン

暗殺団

- アン・オギユン（スナイパーの女性）／チョン・ジヒョン
- チュ・サンオク（連射砲、新興武官学校出身）／チョ・ジヌン
- ファン・ドクサム（爆弾職人）／チェ・ドクムン

韓国臨時政府

- ヨム・ソクチン（警務隊長）／イ・ジョンジェ
- キム・ウォンボン（独立運動家）／チョ・スノウ
- キム・グ（党首）／キム・ホンパ

殺し屋

- ハワイ・ピストル／ハ・ジョンウ
- ヨンガム（ハワイ・ピストルの爺や）／オ・ダルス

暗殺のターゲット

- 川口守（朝鮮総督府 司令官）／バク・ピョンウン
- カン・イングク（親日派の実業家）／イ・ギョンヨン

執事／キム・ウイソク

寺内正毅（初代朝鮮総督）／イ・ヨンソク

川口大尉（川口守の息子）／

満子（カン・イングクの娘、アン・オギユンの双子の姉）／チョン・ジヒョン

アネモネカフェ マダム／キム・ヘスク

2015年・韓国映画・139分

配給／ハーク

<新たなヒットメーカー監督チェ・ドンフンに注目！>

アメリカでは、今年1月に初の女性大統領が誕生するかもしれないが、6月23日の国民投票によってEUからの離脱を決めたイギリスでは、ハブニング的にテリーザ・メイという女性の首相が登場した。もともと、既にドイツではアンゲラ・メルケル首相がいるし、韓国では既に2013年2月からは朴槿惠首相という女性リーダーがいる。中国寄りの政策を推し進めた朴槿惠首相下の韓国は一時アメリカとも日本とも険悪な関係だったが、近時アメリカ陸軍が開発した弾道弾迎撃ミサイル・システムである「THAADミサイル」の設置を決めてからは、少しずつ良い関係になってきた。

そんな韓国に、日本で公開された本作は、ある意味で「反日ドラマ」とも言えるうえ、韓国ドラマ全盛期が過去のものとなった現在、日本での大ヒットは望むべくもないが、2015年の韓国では大ヒット！1270万人を動員し、韓国歴代7位の観客動員成績を挙げているから、すごい。最近私は韓国映画をあまり観ていないこともあって、本作のチェ・ドンフン監督を知らなかったが、それは一体なぜ？

1971年生まれの方は、監督デビュー作『ビッグ・スウィンドル！』（04年）でいきなり、「大鐘賞」「青龍映画賞」「韓国映画評論家協会賞」「大韓民国映画大賞」「釜山映画評論家協会賞」等の新人監督賞を受賞し、2作目『タチャイカサマ師』（06年）で685万人、3作目『チョン・ウチ 時空道士』（09年）で614万人、4作目『10人の泥棒たち』（12年）で1298.5万人の観客動員を打ち出したうえ、続く本作で1270万人を動員したという、すごいヒットメーカー監督らしい。その理由は、すべての作品にアクの強いキャラクター、オリジナリティあふれるストーリー、肉体を駆使した超本格アクションというエンタテインメント性が買われているためらしい。なるほど、本作を観ればそんな大ヒットの要因が満載！

<大韓民国臨時政府とは？その役割は？>

本作導入部の舞台は、日本統治下にある1911年の朝鮮半島。ここでは、1910年に「すべての統治権を完全かつ永久に日本国皇帝に譲渡する」という「日韓併合条約」を締結し、初代の朝鮮総督として京城（現在のソウル）に乗り込んだ寺内正毅（イ・ヨンソク）に対する、韓国独立運動家、ヨム・ソクチン（イ・ジョンジェ）による暗殺襲撃シーンが描かれる。そのターゲットは寺内総督ただ一人だったが、その会食の席に同席し、己の利権を「おねだり」していたのが親日派の実業家カン・イングク（イ・ギョンヨン）。カンの身を挺した奮闘によって、暗殺は残念ながら失敗。逮捕され拷問されたヨムは、日本側の「二重スパイ」になることを余儀なくされることに。

他方、カン以降、総督府から重用されることに。ちなみに、この男のモデルは、日本から爵位と莫大な資産を得た引き替えに祖国を日本に売り渡した売国奴として、韓国では一番の国賊とされている、李完用（イ・ワニョン）らしい。本作に見るカンはその直後、寺内総督の暗殺計画に協力した妻を情け容赦なく殺害。その時、妻と共に逃走していた双子の姉妹のうち、妹の方は行方不明になってしまったが・・・。

本作は、「暗殺」という恐ろしいタイトルながら、チェ・ドンフン監督によるエンタメ巨編。したがって、1919年に起きた、学生・市民・農民たちが「独立万歳」と叫びながら大規模なデモを行った、いわゆる「3.1独立運動」やその直後の1919年4月10日に上海で結成された「大韓民国臨時政府」をストーリーの大きな背景としているが、その歴史意義や内容については全く説明されていない。そのため、その点については、観客一人一人がしっかりと勉強する必要がある。

1911年に中国で起きた「辛亥革命」や、それを指導した「孫文」の活動については、『宋家の三姉妹』（97年）（『シネマルーム1』59頁参照）、『孫文の義士団（十月圍城）』（09年）（『シネマルーム26』143頁参照）、『1911』（11年）（『シネマルーム27』81頁参照）等で日本人もよく知っているが、大韓民国臨時政府については日本人はほとんど知らないはず。したがって、本作の鑑賞を契機にそのお勉強をしっかりと。

<第1の主人公は、女スナイパー>

「スナイパーもの」の名作としては、『ジャッカルの日』（73年）をはじめ、『ザ・シューター 極大射撃』（07年）（『シネマルーム15』67頁参照）、『山猫は眠らない2-狙撃手の掟-』（02年）（『シネマルーム3』128頁参照）、『山猫は眠らない3-決別の照準-』（04年）（『シネマルーム8』381頁参照）、『スターリングレード』（01年）（『シネマルーム1』8頁参照）、『アメリカン・スナイパー』（14年）（『シネマルーム35』24頁参照）等があるが、本作では女スナイパー、アン・オギユン（チョン・ジヒョン）に注目！

『猟奇的な彼女』（01年）（『シネマルーム4』132頁参照）で、何とも暴力的な女の子役を演じたチョン・ジヒョンが、本作では「日帝」に母親を殺されたうらみを晴らすべく、韓国独立軍最高のスナイパーに成長。

時は、1911年の寺内総督の暗殺未遂事件から22年を経た1933年。今はなぜか韓国臨時政府の警務隊長に収まっているヨムの手によって刑務所から脱獄したアンは、上海のミラボ・ホテルに集結して、連射砲のチュ・サンオク（チョ・ジヌン）、爆弾職人のファン・ドクサム（チェ・ドクムン）と共に暗殺団を結成。「韓国独立万歳！」のかけ声とともに一枚の写真に取まった3人は、アンを隊長として、朝鮮総督府司令官川口守（バク・ピョンウン）と親日派のカン・イングクを暗殺するべく、京城に向かうことに。

スナイパーは徹底的に「個人技」が売りだから、孤高の美しさとカッコ良さがあるが、本作の第1の主人公となる女スナイパーのアンは、当然それらの魅力を持っているうえ、美人だから一層カッコいい。また、スナイパーのくせに目を悪くしているらしく、眼鏡をかけると愛嬌があるうえ、仲間との相性や3人のチームワークも抜群だから、女隊長としての能力もOK。本作ではそんな女スナイパーの魅力をたっぷり楽しみたい。

<第2の主人公は、二重スパイの複雑な男>

本作導入部で見たとおり、寺内総督の暗殺に失敗したヨムは、その後、韓国臨時政府の警務隊長として、党首のキム・グ（キム・ホンパ）や独立運動家のキム・ウォンボン（チョ・スノウ）と共に活動していた。1933年の今、ヨムに与えられた任務は、アンら3人を、新たな暗殺計画に差し向けること。韓国独立軍の彼らが暗殺の実行犯に選ばれたのは、まだ彼らの名前と顔が「日帝」に知られていないためだが、さて、ヨムはいかなる手はずで彼らを刑務所から脱獄させ、暗殺の実行をさせるの？

「スパイもの」では「二重スパイ」はよくあるし、ハン・ソッキュが熟演した韓国映画『二重スパイ』（03年）はすごい映画だった（『シネマルーム3』74頁参照）。しかし、暗殺をテーマにした「アクションもの」の本作には、本来「二重スパイ」を登場させる必要はない。ところが本作では、3人の暗殺団を雇ったヨムがたちまち「二重スパイ」的動きを見せるので、アレレ・・・。

上海の日本領事館は、ミラボ・ホテルに集結したアンら3人の暗殺団を一網打尽にすべく、「ミラボ検挙作戦」に乗り出したから、暗殺団の3人の命は風前の灯火だ。それにしても、一方で3人に暗殺計画を指令しながら、他方でその3人を検挙しようとするとは！導入部ではえらくカッコいい独立運動家の暗殺者だったヨムが、本作中盤ではそんな複雑な「二重スパイ」役を二重に演じるので、それに注目！さらに、ヨムはこの「ミラボ検挙作戦」に失敗すると、今度は「3人の暗殺団」を殺害するべく、本作第3の主人公となる、ハワイ・ピストルを雇うことになる。この第2の主人公が、本作全編を通じて果たす役割は？

<第3の主人公は、殺し屋・ハワイ・ピストル！>

マカロニウェスタン風の韓国映画の代表は、1930年代の満洲を舞台として、3人の男たちが地闘争奪戦を繰り広げた『グッド・バッド・ウィアード』（08年）（『シネマルーム23』122頁参照）。しかし、第3の主人公として本作に登場するハワイ・ピストルと呼ばれる殺し屋（ハ・ジョンウ）には、どことなくマカロニウェスタンの雰囲気がある。また、面白いのは、この男は、相棒である爺やことヨンガム（オ・ダルス）と常に一対で登場することだ。

『チェイサー』（08年）では刑事から追跡される「殺人機械」と呼ばれる連続殺人犯役を演じ（『シネマルーム22』242頁参照）、『依頼人』（11年）では韓国で2008年から施行された、「国民参与裁判制度」を選択する一匹狼のキヤラの弁護士役をクールに演じた（『シネマルーム29』184頁参照）、韓国を代表する俳優ハ・ジョンウが、本作では無国籍の雰囲気を持った、かつての小林旭のようなカッコいい殺し屋役を演じているので、それに注目！

ヨムから金で雇われた殺し屋であるハワイ・ピストルの役割は、アンたち3人の暗殺団を殺すこと。そんなハワイ・ピストルも日本軍から身を隠さなければならない立場にあるのはアンと同じだが、上海のミラボ・ホテルの喫茶室の中で不審な客のチェックが始まる中、はじめてのコーヒーをハワイ・ピストルの飲み方を参考にしながら味わっていたアンは、ハワイ・ピストルといかなる「出会い」を？また、ハワイ・ピストルは危険を避けるため、一体いかなる機転を？この時の新鮮な「出会い」と、ハワイ・ピストルがアンの首にマフラーを巻きつけるカッコいい「別れ」の中で、ひょっとしてこの2人の間には恋心が・・・？

<中盤のハイライトは、「三つ巴」の銃撃戦！>

上海での難を逃れ、京城のアネモネカフェのマダム（キム・ヘスク）の下に集結した3人の暗殺団の暗殺実行日は、1933年11月7日。その計画は、政略結婚が決まった朝鮮総督府司令官川口守の息子、川口大尉とカン・イングクの娘、満子（チョン・ジヒョン）のために両家が集う会食の後、川口司令官とカンが京城駅に向かう途中に一軒のガソリンスタンドに立ち寄ることを余儀なくさせて、そこを襲うというもの。そのためは、川口司令官とカンが乗る車がガソリンをあらかじめ抜いておかなければならないが、さてそのための工作は・・・？

暗殺団はそんな計画の実行のための準備を着々と進めたが、他方でヨムが雇った殺し屋であるハワイ・ピストルとヨンガムは3人の暗殺団の計画実行を阻止すべく、彼らの監視を強めていた。さらに、「二重スパイ」としてすべての情報を握るヨムは、日本軍やカンと連絡を密に取りながら、当日を迎えようとしていた。

そして、いよいよ暗殺計画実行の日。爆弾職人のファンが仕掛けた爆弾によって作戦が開始され、チュの手からは連射砲がぶっ放されるとともに、アンの銃口の先には「標的」が現れたが、その成否は？アンにとって「想定外」だったのは、ヨムから漏れた情報によって、アンたちを待ち受ける駐屯車との間で激しい銃撃戦を余儀なくされたこと。さらに、カンの隣にはアンの双子の姉である満子の美しい姿もあったから、アンがそれに動揺したのは当然だ。本作中盤のハイライトとなる、日本軍を交えた三つ巴の暗殺劇（銃撃戦）は見応え十分だから、ハラハラドキドキしながらしっかり楽しみたい。

ここでも川口司令官とカンの暗殺は失敗に終わったが、あくまで暗殺団の隊長として、川口司令官とカンの暗殺を目指すアンの、次なる暗殺計画は？

<2人の俳優の日本人へのなりすましは不自然だが>

1933年当時の上海は「世界の魔都」と言われた国際都市だから、日本語、中国語、韓国語（朝鮮語）はもとより、西欧各国の言葉が飛び交う大都市だった。また、日本に併合された朝鮮半島の総督府がある首都・京城では、日本語と韓国語（朝鮮語）の両方が使われていたのは当然だ。大ヒットした韓国映画『バトル、オーシャン/海上決戦（鳴梁海戦）』（14年）と同様、本作では川口守、川口大尉をはじめとする日本人役もすべて韓国人俳優が演じているから、その日本語には明らかに違和感がある。それは仕方ないものとして納得するのが、本作や最近大ヒットした韓国映画『バトル、オーシャン/海上決戦』を鑑賞するについての「ルール」だが、さすがに韓国人俳優が日本人に化けるシーンを見ていると、日本語の喋り方がおかしいだけですぐにバレてしまいうこと確実！と思えてしまうから、その違和感を無理矢理押さえつけなければならないことになる。日本人将校・川口大尉と列車の中で知り合い、うまく日本人（それも日本人将校）に化けたのは、ハワイ・ピストルとヨンガム。無国籍さが際立つハワイ・ピストルが川口大尉との微妙な会話をうまくごまかしながら信頼を得ていく姿は面白いので、その化け方（なりすまし）方に注目！

他方、京城での奮闘も虚しく、ターゲットの暗殺に失敗したアンは、自分の目の前で満子を射殺するカン・イングクの姿を目撃。これはもちろん、カンが満子をアンと誤解したためだが、それならその誤解のうえで、自分が満子に化けてカンのお屋敷に入ることができるのでは？そうすればさらに、川口大尉との結婚式の場で再度撃ち濡らした川口守とカンの暗殺も可能になるのでは？そう考えたアンは、まんまとカンの娘満子に化けてカンの屋敷に入ったが、そんななりすましは一体いつまで通用するの？

<花嫁姿には拳銃がよく似合う？銃撃戦の結末は？>

父親のカンは騙せても、さすがに執事の目は・・・？そんな執事を殺害したアンはまんまと満子になりすまし、いよいよ今日は三越百貨店でされる川口大尉との結婚式に臨むことに。アンはプークの中に拳銃を忍ばせていたが、これをいつ、どんなタイミングで発射するの・・・？

他方、いかに金のためとはいえ、祖国のために命をかけているアンたちを殺す任務に葛藤を覚えながらも、ハワイ・ピストルはまんまと川口大尉の警護役として三越百貨店でされる結婚式場に入り込んでいたが、彼は一体何を警護するの？さらに、今や完全に日本軍のスパイとしての顔を明確にし、日本兵を指揮しながらアンたち暗殺団の襲撃を監視する役割を担うヨムは、結婚式場でいかなる警備を？

そんな三者三様の思惑の中、新郎の父親・川口守の挨拶がはじまり、ウエディングドレスに身を包んだアンが父親のカンに手を引かれて入場して行く途中で、ヨムはハワイ・ピストルが招待客用のテーブルに座っているのを発見したから、事態は急を告げること。そして、突然エレベーターの中に身を潜めていたヨンガムのマシンガンが火を噴いたから、たちまち式場はメチャメチャに。かつて、菓師丸ひろ子が主演した『セーラー服と機関銃』（81年）ではセーラー服に機関銃がよく似合っていたが、ここでは花嫁姿に拳銃がよく似合うかとよくわかる。

ド派手な銃撃戦の中でも、生き残ったハワイ・ピストルとアンは川口大尉を人質として結婚式場を抜け出し、ヨンガムが乗りつけてきた車でマシンガンをぶっ放しながらアネモネカフェに逃げ込んだ。しかし、ヨムが指揮する日本軍は次々とその外を固めたから、もはや彼らは袋の鼠。ギブアップする以外に方法はないの？いやいや・・・。

<死んでいく者は？生き残る者は？>

本作は139分という上映時間の中に、複雑な人間関係と、その中で渦巻く憎悪、策略、裏切り、友情等の感情がタツプリ盛りこまれているうえ、ミステリー色とエンタメ色もタツプリだから、メチャ面白い。ハワイ・ピストルとヨンガムそしてアンの3人が人質の川口大尉を連行して何とかアネモネカフェに逃げ込んで、更にそこからの脱出方法がなければこの3人は袋の鼠。それは誰の目にも明らかだが、ここでも、どこかのシーンでどこかの壁をぶち抜けば秘密の通路があるという会話がされていたから、そこから活路が開けるのでは・・・？そう考えていると、案の定・・・。

『レ・ミゼラブル』（12年）では、巨大な地下水路の中で、傷ついた青年マリウスを背負って逃げるジャン・バルジャンと、これを追うジャバル警部との追跡戦が中盤の見どころだった（『シネマルーム30』48頁参照）が、この地下水路の大きさを見れば、19世紀にフランスが行っていた「公共事業」の立派さがよくわかる。それに対して、1933年当時の大韓民国の首都・京城における排水溝の整備状況は？その大きさは？そして、その出口は？

昔の日本のチャンバラ映画では、主人公だけはいくら斬られても、簡単に死ななくてもいいという不文律があった（？）が、それは本作でも同じらしい。アンも川口大尉と共に連れ去られた人質だと誤解している日本軍に対してアンを解放した後、ある地点にあるマンホールから脱出しようとしたハワイ・ピストルとヨンガムは、そこで待ち伏せしていたヨムや日本軍から一斉射撃を受けたが、なかなかどうして彼らは簡単に死なないのがミソだ。そのうえ、ヨムから何発も銃弾を受けながらヨムに向かっていったハワイ・ピストルは、ついにナイフをヨムの胸にグザリと・・・。これにて2人は相打ち・・・？さあ、こんな壮絶な銃撃戦と肉弾戦の中で、死んでいく者は？逆に、生き残る者は・・・？

<韓国の解放は？あっと驚く結末は？>

「大東亜共栄圏」の構築を目指した中国大陸への進出から、さらに米英との全面戦争に発展した「先の大戦」で敗北した「大日本帝国」の戦争指導者たちには、戦後の「東京裁判」が待ち受けていた。他方、劇団四季のミュージカル『李香蘭』では、中国と日本という2つの祖国を持って大活躍した李香蘭こと山口淑子にも、漢奸としての裁きが待っていた。

しかし、日帝が侵略戦争に敗れ、韓国が独立を果たした後も生き延びたヨムは、その時点で微妙な立場に立たされることになったのは当然。戦争が終結し、韓国が独立した1949年当時ヨムは既に60歳を越えていたが、この時、裏切り者として裁かれる立場になっていたヨムは法廷でいかなる弁明を？その法廷で、裁判官から「なぜ祖国を裏切ったのか？」と質問されたヨムは、完全に開き直って「朝鮮が解放される（独立できる）とは思ってもしなかったからだ」と答えたからすごい。さらに、傍聴席から罵倒されモノを投げつけられた彼が、上半身を裸にして自身が受けた拳銃の弾跡を見せて、己の信念をアピールする姿には既に60歳代になっているとは思えない迫力がある。その結果、反民族行為については無罪、法廷を侮辱した罪では罰金で終わったから、結局ヨムの勝利・・・？そこらあたりは、何とも複雑なところだ。

さあ、本作もそろそろ「シエンド」を迎えるはずだが、本作の結末はいかに？そう思っで観ていると、晴れやかな顔（？）で法廷を出てきたヨムがふと見かけたのがアンの姿だ。やっぱりアンも生き残っていたの？その姿に惹かれるように後を追ったヨムは、ある場所に引きずり込まれるように入っていったが、そこで待ち受けていたものとは・・・？私は本作の評論をかなり詳しく書いてきたが、さすがにこの最終的結末だけは書かないでおこう。そこで起きる「あっと驚く結末」は、あなた自身の目でしっかりと。なるほど、裁判はうまく逃れることができても、人間同士の因縁から逃れることはできないということ・・・？